

見られる。13世紀中頃～14世紀初頭前後(72)であるが13世紀後半～14世紀前半に増加する。瀬戸・美濃焼は13世紀代(62・63)、14世紀代(69)である。珠洲焼は12世紀後半～15世紀前半である。主体となる時期は1区では12世紀後半～13世紀前半、2区では12世紀後半～13世紀前半と13世紀末葉～14世紀中葉、1区と隣接する3区では13世紀末葉～14世紀中葉、4区は時期決定の可能な遺物がないため不明である。このように2時期に画期を設定できる。

まず、1番目の画期である12世紀後半～13世紀前半は珠洲焼の吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期に相当する。珠洲焼の中でも片口鉢が多く出土し、Ⅰ期に属するものは2区SE328(25・26)・SE111(29)・SD768(52)がある。いずれも胴部は丸みをもって立ち上げて口縁部は内湾ぎみにおさめ、端部は角が生じるほどしっかりと面取りし、わずかに外傾するというⅠ期の特徴をよく表す資料である。SE111では中世土師器と珠洲系陶器が相伴しており出土層位からこれらも珠洲焼と同時期に位置付けられるだろう。Ⅱ期の片口鉢は1区SE17(8)、2区SE110(14)・SD42(35)・SD58(44・45)・Pit107(54)があげられる。口縁部はⅠ期と同様に内湾ぎみになるが、端部はやや丸みを帯びる。卸目が施される個体が増加する時期である。8の出土した2層の上層である1層からは中世土師器皿(7)が出土している。珠洲焼以外では青磁と白磁がわずかに伴う。

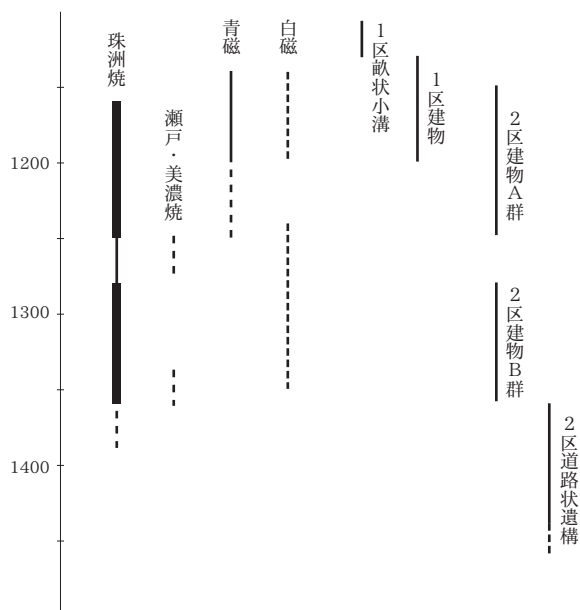
2番目の画期とした13世紀末葉～14世紀中葉は珠洲焼の吉岡編年Ⅳ1・Ⅳ2期に相当する。この時期の珠洲焼は2区SE14(13)・SD42(36・37)・SD38(40)があげられる。胴部は直線的に開き、口縁端部は厚みを増してさらに外端部を摘むようにおさめるのが特徴である。珠洲焼以外では瀬戸・美濃焼と白磁がわずかに伴う。

有力者の存在を窺わせる威信財となる高級陶磁器、職人の存在を示唆できる遺物が出土していないことから一般農耕民で構成された集落であろう。また、天目茶碗などの喫茶に関する茶道具類も見られないことから喫茶習慣が一般集落に浸透し始める15世紀〔水澤2005〕までは存続していなかったものと推測している。中世の陶磁器に占める珠洲焼片口鉢の割合は高く破片点数比で45%を占めている。一方で食膳具での碗皿類は23%である。土器・陶磁器の碗皿類が低率であることは遺存しにくい木製品や漆器の食膳具が主体を占め、土器・陶磁器はこれらを補完するという状況を反映しているものと考えられる。

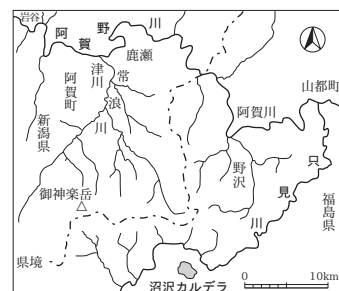
### 第3節 細池寺道上遺跡の軽石製石製品について

細池寺道上遺跡出土の石製品のうち、特徴的な遺物として28点出土した軽石製石製品がある。軽石製石製品は軽石製の石製品と言う意味あいでは用いている。軽石製石製品は新潟市域の調査では、経験的に阿賀野川流域の遺跡に多いとの認識があった。その中で、今回の細池寺道上遺跡の調査で軽石製石製品はバラエティーに富んでいる。その位置付けを行うために、以下に、軽石の性質を記し、石製品の形態と分布の概要、通時的な特徴を示す。

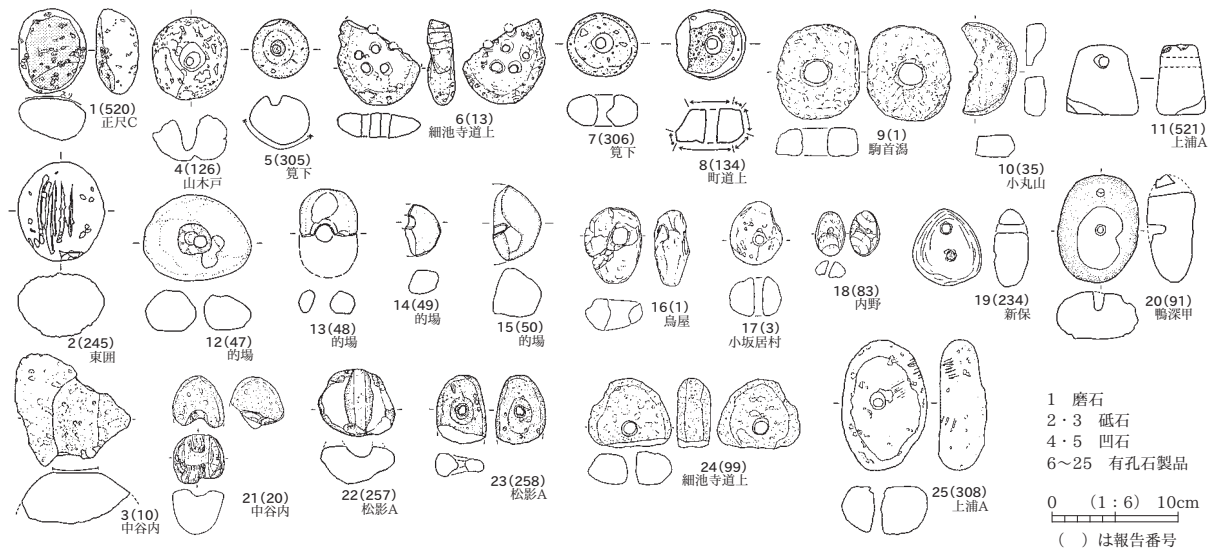
軽石製石製品の軽石は火山砕屑物の一種である。多孔質で見かけ密度が小さい。白色から褐色を呈する。輝石・角閃石・斜長石・石英・黒雲母などの鉱物結晶が含まれる。多孔質の性質のため、水に浮く場合があり、別名浮石とも呼



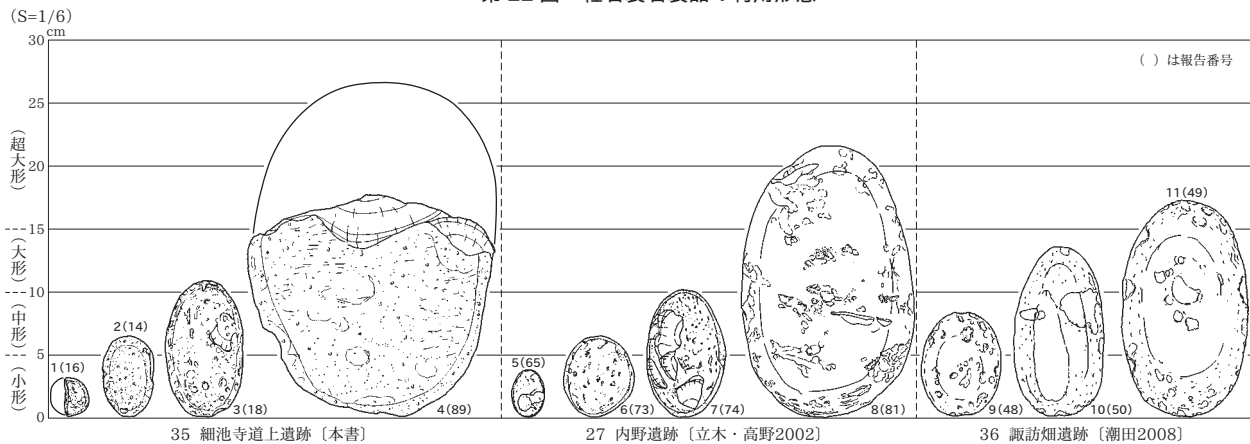
第20図 遺跡の変遷



第21図 沼沢カルデラ・只野川・阿賀野川的位置  
(〔稲葉ほか1976〕を一部改変)



第 22 図 軽石製石製品の利用形態



第 23 図 軽石製石製品円礫の分類

ばれる。安山岩質、デイサイト質、流紋岩質など珪長質のマグマの発泡によって生じる<sup>注1)</sup>。

細池寺道上遺跡を含む越後平野周辺には、軽石が噴出するような火山は確認できない。軽石の噴出源については、細池寺道上遺跡からの距離を考えると細池寺道上遺跡の南東 53km にある、阿賀川支流只見川流域にある沼沢火山（カルデラ）〔山元 2003〕（第 21 図）の可能性が高いと考えている。沼沢火山の噴出物層序では、約 11 万年前の尻吹峠火砕堆積物及び芝原降下堆積物、約 7 万年前の木冷沢溶岩、約 4.5 万年前の水沼火砕堆積物と約 4 万年前の惣山溶岩、約 2 万年前の沼御前火砕堆積物及び前山溶岩、紀元前 3,400 年頃<sup>注2)</sup>の沼沢湖火砕堆積物が確認されている〔山元 2003〕。沼沢火山で最後に起きた沼沢湖火砕堆積物を堆積させた火山活動は、噴煙は南側に偏って流れ新潟県側に直接的に影響を与えていないが、阿賀川を経て、阿賀野川に土石流として流れ込み現在の津川盆地をせき止め一時的に湖沼化している。その水成堆積層は「沼沢浮石質砂層」〔只見川第四紀研究グループ 1966a・b〕「鹿瀬軽石質砂層」〔稲葉ほか 1976〕と呼称され、場所によっては数 m 以上の堆積が確認され、広く盆地内に堆積している。せき止め湖はそれほど時間を置かず決壊し、阿賀野川下流域に堆積物を供給した。沼沢火山を噴出源とする軽石はこの堆積物層に含まれ、福島県西会津町野沢では 25cm の軽石礫を含むが、下流では礫が小さくなるとされる〔稲葉ほか 1976〕。この軽石礫は、下流域の段丘や現・旧阿賀野川河床に堆積している。下流域にもたらされた軽石はより小形のものと推定される。

次に細池寺道上遺跡周辺の遺跡での様相を確認するために、新潟市域の遺跡を中心に阿賀野川下流域の軽石製石製品の略集成<sup>注3)</sup>を行い（第 22～24 図、第 7 表）、53 遺跡を確認した。時代的には遺跡の中心時期から判断して縄文時代から江戸時代までの長期間にわたって遺跡で確認出来る。一番古いものは縄文時代前期前半の布目





第24図 阿賀野川下流域の軽石製石製品出土遺跡分布図

※第7表掲載のうち1～6・9・37～39・47・49・53は第24図範囲外



第 7 表 阿賀野川下流域の軽石製石製品出土遺跡

No.	遺跡名	所在地	時代(期)	現阿賀野川 との距離 (km)	軽石製石製品													備考	文献
					磨石	砥石	有孔 石製品	凹石	円礫 超大型	円礫 大型	円礫 中形	円礫 小形	礫片	その他	不明	点数			
1	布田A	新潟市西蒲区	縄文前期前葉か	25.2	2												2	報告書掲載数	(小熊 1994)
2	豊原	新潟市西蒲区	縄文前期後葉～中期前半	28.0	1												1	報告書掲載数	(小野・前山 1994)
3	上ノ原	新潟市西蒲区	縄文後期前半	25.8	1												1	報告書掲載数	(前山 1994)
4	林付	新潟市西蒲区	平安(9C後半)	20.0		1					1						2	報告書掲載数	(相田 <sup>注4)</sup> ・2012)
5	大敷	新潟市西区	中世	22.8									2				4	写真掲載数	(新潟市史編さん委員会 1994)
6	の場	新潟市西区	平安9C前半	14.0		5	4		1						253	263	総数	(小池・藤塚 1993)	
7	近世新潟町	新潟市中央区	近世18～19C	7.7	2												2	報告書掲載数	(佐藤 <sup>注4)</sup> ・2008)
8	山木戸	新潟市東区	平安・中世	4.8					1				2				3	報告書掲載数	(諏 <sup>注4)</sup> 山 2004)
9	小坂居付	新潟市南区	中世(13～14C)	12.0	1			1									2	報告書掲載数	(佐藤 <sup>注4)</sup> ・2012)
10	正尺C	新潟市北区	古墳前期	5.5	1												1	報告書掲載数	(土橋 <sup>注4)</sup> ・2006)
11	松影A	新潟市北区	縄文・弥生～古墳	7.5		1	2					1					4	報告書掲載数、有孔石製品1点縄文	(加藤 <sup>注4)</sup> ・2001)
12	上大川	新潟市北区	古墳前期	5.7		1			1				1				3	報告書掲載数	(渡邊・池田 2009)
13	下大川	新潟市北区	古墳前期	5.8								1					1	報告書掲載数	(今井 2008)
14	鳥屋	新潟市北区	縄文晩期	5.2				1									1	報告書掲載数	(阿部 1988)
15	小丸山	新潟市江南区	平安(9C)	1.2		1	1			1	1						4	報告書掲載数	(小池・木間 1995)
16	東明	新潟市江南区	古墳前期	2.1		2											2	報告書掲載数	(朝岡・諏 <sup>注4)</sup> 山 2003)
17	三王山	新潟市江南区	古代・中世	4.4	1							1					2	報告書掲載数	(朝岡 <sup>注4)</sup> ・2010)
18	手代山北	新潟市江南区	古墳以降	5.4	1							1					2	報告書掲載数	(朝岡 <sup>注4)</sup> ・2009)
19	荒木前	新潟市江南区	平安(9C)	4.9								2					2	報告書掲載数	(川上 1996)
20	日本	新潟市江南区	平安(9C後)	5.1								1	1	12			14	総数	(立木・細野 2013)
21	西郷	新潟市江南区	弥生中期	5.9	1			1									2	報告書掲載数	(土橋 <sup>注4)</sup> ・2009)
22	駒首湯	新潟市江南区	平安(9C)	6.5			1				2		2				5	報告書掲載数	(渡邊 <sup>注4)</sup> ・2009)
23	居屋敷	新潟市江南区	平安か	0.5						1	1						1	報告書掲載数	(諏 <sup>注4)</sup> 山 2007)
24	上郷	新潟市江南区	平安9C	1.2						1		1					2	報告書掲載数	(赤羽・高橋 1994)
25a	結七島	新潟市秋葉区	平安9C	3.6								1	2				3	報告書掲載数	(朝岡 2008)
25b	結七島	新潟市秋葉区	平安9C(前～後)	3.6								2	1				3	報告書掲載数	(龍田 <sup>注4)</sup> ・2012)
26	江内	新潟市秋葉区	近世	2.8		4						1					5	報告書掲載数	(春日 <sup>注4)</sup> ・1996)
27	内野	新潟市秋葉区	中世(13C～15C)	0.9			1		2	1	5	4	6				19	総数	(立木・高野 <sup>注4)</sup> ・2002)
28	中谷内	新潟市秋葉区	平安9C後	2.5	1	1	1		3		6						12	報告書掲載数	(立木 <sup>注4)</sup> ・1999)
29a	沖ノ羽(B地区)	新潟市秋葉区	平安(9C)・中世(13C)	2.1		2											2	報告書掲載数	(星野 <sup>注4)</sup> ・1996)
29b	沖ノ羽(C地区)	新潟市秋葉区	平安(9C)	2.1				1									1	報告書掲載数	(春日 2003)
29c	沖ノ羽	新潟市秋葉区	平安(9C)	2.1								2	3				5	報告書掲載数	(細野 <sup>注4)</sup> ・2002)
29d	沖ノ羽	新潟市秋葉区	平安(9C後)	2.1						1	3	4	1				9	総数	(立木・澤野 <sup>注4)</sup> ・2003)
29e	沖ノ羽	新潟市秋葉区	平安(9C)	2.1		1						5	8	6			20	総数	(立木・澤野 <sup>注4)</sup> ・2012)
29f	沖ノ羽	新潟市秋葉区	平安(9C)・中世(13～15C)	2.1						2	1	11	24				38	報告書掲載数	(遠藤・澤野 <sup>注4)</sup> ・2014)
30	山王浦	新潟市秋葉区	平安(9C後半)	1.6								2	1	1			4	総数	(立木・澤野 <sup>注4)</sup> ・2004)
31a	上通A	新潟市秋葉区	平安(9,10C)	4.3			1										1	報告書掲載数	(坂上 2003)
31b	上通A	新潟市秋葉区	平安(9C前半)	4.3			1					1		1	1		4	報告書掲載数	(川上 1997)
32	川根	新潟市秋葉区	平安(9C後～10C前半)	6.9										5			5	総数	(立木 <sup>注4)</sup> ・2000)
33	八幡山	新潟市秋葉区	弥生後期	5.8									3				3	総数	(渡邊・立木 <sup>注4)</sup> ・2001・2004)
34a	大沢谷内	新潟市秋葉区	下層(縄文晩期)	9.9								2					2	報告書掲載数	(細野・伊比 2012)
34b	大沢谷内	新潟市秋葉区	上層(7C後半～14C)	9.9	2												2	報告書掲載数	(細野・伊比 2012)
34c	大沢谷内	新潟市秋葉区	中世(13C前)	9.9	1												1	報告書掲載数	(前山 <sup>注4)</sup> ・2012)
35a	細池寺道上	新潟市秋葉区	平安(9C後)	1.3			1										1	報告書掲載数	(立木・渡邊 <sup>注4)</sup> ・1998)
35b	細池寺道上	新潟市秋葉区	中世(13～15C)	1.3						2	1	6	1				10	報告書掲載数	(潮田 2014)
35c	細池寺道上	新潟市秋葉区	中世(13～15C)	1.3			1		1	1	3	7	4	12			28	総数	(本書)
35d	細池寺道上	新潟市秋葉区	平安(9C)・中世(13～15C)	1.3							1						1	報告書掲載数	(小池 <sup>注4)</sup> ・1994)
36	諏訪郷	新潟市秋葉区	平安(9C後)	2.5							1	1	1				3	報告書掲載数	(潮田 2008)
37	蓬野1	聖籠町	縄文後期後葉	10.3										1			1	総数	(石田・渡邊 2013)
38	湯尻	聖籠町	縄文後期後葉、古墳前・中期	10.3										3	5		8	総数	(石田・渡邊 2013)
39	金港	聖籠町	奈良・平安(8C前～9C)	14.5													1	総数	(石田・高橋 2009)
40	町道上	阿賀野市	中世(14C)	2.5						2	3	3					9	報告書掲載数	(古澤 2002)
41	山口	阿賀野市	弥生前・中期、平安	3.3						1	1	1					2	報告書掲載数、円礫大型古代	(荒谷 <sup>注4)</sup> ・2010)
42	鴨深甲	阿賀野市	平安(9C)、中世(14～15C前半)	3.3							1						2	報告書掲載数	(高橋 <sup>注4)</sup> ・2006)
43	柄日本	阿賀野市	平安(8C後～9C前)・中世(13C後～14C後)	2.9								1					1	報告書掲載数	(加藤 <sup>注4)</sup> ・2013)
44	大坪	阿賀野市	中世(12～13C)	4.7								1		1			2	報告書掲載数	(荒川 <sup>注4)</sup> ・2006)
45	小山崎	阿賀野市	縄文後期前半	2.8								4	1			6	11	総数	(山川 <sup>注4)</sup> ・2000)
46	六野瀬	阿賀野市	縄文晩期後葉	0.1								1	1				2	報告書掲載数	(石川 <sup>注4)</sup> ・1992)
47	新保	五泉市	平安(9C)	6.6	1		1					1		1			4	報告書掲載数	(山崎 <sup>注4)</sup> ・2004)
48	榎表	五泉市	近世	5.4		3											3	報告書掲載数	(山崎 <sup>注4)</sup> ・2005)
49	巳ノ明	五泉市	縄文後期初頭	5.5												27	28	総数	(山崎 <sup>注4)</sup> ・2004)
50	中田	五泉市	平安(9C)	4.0		1											1	報告書掲載数	(長澤 <sup>注4)</sup> ・2004)
51	寛下	五泉市	平安(9C)	4.4				1	1		1						3	報告書掲載数	(山崎 <sup>注4)</sup> ・2004)
52	馬下稲場	五泉市	縄文後期	0.6													+		(川上 1983)
53	馬越	加茂市	奈良平安(8C中～10C前)	20.0									2				2	報告書掲載数	(伊藤 2002)

※円礫 小形0.1～5.0cm、中形5.1～10.0cm、大型10.1～15.0cm、超大型15.1cm以上

A 遺跡がある<sup>注4)</sup>。それ以外縄文時代は晩期の遺跡まで 11 遺跡で確認できる。弥生時代には 2 遺跡で確認され、古墳時代は 3 遺跡、古代 34 遺跡、中世 11 遺跡、近世 3 遺跡で確認されている。調査遺跡数に左右される面があるが、古代・中世で比較的普遍的に用いられているといえよう。いずれにしろ、縄文時代にはじまり近世まで継続して利用される息の長い遺物であると言える。

軽石製石製品の利用形態<sup>注5)</sup>として磨石(第22図1)・砥石(第22図2・3)・凹石(第22図4・5)として使われたものが確認される(第22図)。特徴的な遺物として有孔石製品(第22図6～25)がある。縄文時代から中世の遺跡までに使われている通時的な石製品である。素材に対して多孔のもの(第22図6)、円盤状の素材の中心に孔が穿たれたもの(第22図7～10)、楕円形の素材の中心に孔が穿たれたもの(第22図12～18・21～25)<sup>注6)</sup>、素材の片側に偏って孔が穿たれているもの(第22図11・19・20)がある。そのうち、多孔のものは甑の下敷として(第22図6)、円盤状のものは紡錘車として利用された(第22図7～9)と考えられる。平面形が台形のもののは権状錘として(第22図11)の利用も考えられる。楕円形素材の中心や、片側に偏って孔が穿たれたものの多くは水に浮くものは浮子として、沈むものは錘としての利用(第22図12～25)が想定される。また、軽石製石製品の大多数を占めるのは剥離や穿孔などの大幅な加工が無い円礫である。縄文時代から近世に至る遺跡に出土し、無加工の状態で使用された石製品である。形状は円から楕円形で法量により4類に分かれる(第23図)。時代を跨いだ全体の傾向として小形品(～5cm)が35%、中形品(5.1～10.0cm)が49%、大型品(10.1～

15.0cm) が8%、超大形品 (15.1cm 以上) が8% であった。中形品の比率が多い。円礫は擦磨痕が観察され、擦る・砥ぐなどの要素に加え、超大形品は細池寺道上遺跡例の第23図4のように剥片剥離され使用した例もある。あたかも弥生時代以前の剥片石器の石核のように使用され、剥離された剥片様のものは利器として利用されたり、さらに磨石と台石を用いて砕かれ研磨材あるいは土器の混和材として使用されたのかもしれない。

分布としては地域的な発掘調査の多寡に関係する面があるが、阿賀野川流域に比較的遺跡が多い。第7表に参考までに現在の阿賀野川の流路との直近の距離を示したが、円礫のうち超大形品は、古代の官的要素の高い遺跡〔坂井1996〕である的場遺跡を除き阿賀野川と3km 圏内に出土している。当時からの阿賀野川流路変更〔大矢・加藤1984〕を考慮しても阿賀野川との結びつきが強く考えられる。傍証ながら、古代遺跡が多数存在する信濃川流域の加茂市内の遺跡では、馬越遺跡〔伊藤2005〕に2点を確認したのみであり信濃川水系近隣には採取地がなかった可能性が高い。

以上のように、軽石製石製品は縄文時代から江戸時代まで、さらに現代まで長い間使い続けられた石製品である。実際はどこで採集され、遺跡に持ち込まれたものであろうか。昭和30年(1955)頃まで江南区・秋葉区の阿賀野川河川敷では軽石の採取が比較的容易であった<sup>注7・8)</sup>。現代の河川工事が大幅に行われた阿賀野川では軽石の採取は困難であるが<sup>注9)</sup>、縄文時代以降の近代まで阿賀野川下流域での採取は可能であったと考えられる。このことから、今回集成した阿賀野川下流域の遺跡では直接・間接の区別は不明であるが軽石製石製品の大部分は沼沢火山起源のものである可能性が高い。阿賀野川に近い中世の遺跡である細池寺道上遺跡では直接的な採取が行われていたと考えられる。今後、理化学分析などの手法を用いての検証が必要であろう。また、軽石の流通も時代・時期によって異なることが想像され<sup>注10)</sup>、広域での比較を通した検討も今後の課題である。

## 第4節 細池寺道上遺跡の様相について

今回の細池寺道上遺跡発掘調査の出土遺物や切り合い関係をもとに検討してきた結果をまとめると、1区畝状小溝(12世紀前半)→1区建物群(12世紀後半)、2区建物A群(12世紀後半)→2区建物B群(13世紀末葉～14世紀中葉)→2区道路状遺構(14世紀末葉～15世紀前半)の順に変遷してきたことがいえる。2区については13世紀前半～後半にかけて断絶した時期があるが12世紀前半から15世紀前半までの長期にわたり利用されていた。

1区ではムギ類やイネを栽培する耕作地として利用されていた土地を12世紀後半には居住地に転用している。1区の遺構で特徴的なものに7基検出された井戸がある。各井戸には時期差があるが地形に対して東西に一直線に並行している。当時の地下水脈に沿って設置されたのだろう。集落を営むにあたって、井戸水を継続的に必要としていたといえる。

1区の花粉分析結果から復元された中世の包含層であるⅢa・Ⅲb層の堆積した当時の環境は、乾燥を好むイネ科・ヨモギ属をはじめアブラナ科・タンポポ亜科などの草本主体の人里植物や耕地雑草が生育する風景である。また、栽培植物を含むソバ属・アブラナ科が検出されていることから近隣にこれらを栽培する畑の存在が想定できる。樹木ではハンノキ属・ナラ類(コナラ属コナラ亜属)・マツ類(マツ属複雑維管束亜属)などの分布が考えられる。

2区の遺構では前述した道路状遺構が重要である。少なくとも4回の補修工事がおこなわれており、130年間継続的に維持管理された幹線道路として利用されていたと考えられる。また、私道的な道路ではなく公道的な性格をもった道路の可能性もある。

2区では基本層序の花粉分析を実施していないが、1区とはさほど変わらない植生環境を呈していたであろう。2区で行った井戸覆土内から出土した種実同定を行った結果、モモ・イネ・オオムギ・コムギ・アサ・ササゲ族・ナス・トウガン・ウリ類・ヒョウタン類など多様な栽培植物が確認された。集落周辺の畑・田などで多種類の栽培植物が栽培されていたことが窺える。また、井戸中に捨てられた食物残渣の一部という見方から、中世の多様